
君の笑顔を守りたい

夢未

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の笑顔を守りたい

【Nコード】

N6393I

【作者名】

夢未

【あらすじ】

妖精のリオは怪我をして立ち往生していたところを大学生の輝哉に助けられる。怪我が治るまでの間、同居することになったリオは純粋な輝哉に次第に惹かれていく。だが輝哉にはすでに恋人弥生がいた。弥生は重い病気に罹っていた。生死を彷徨う弥生を救おうとリオは妖精界での禁忌を犯そうとするのだが…。

(1)

「里央……?」

少女は自分の部屋に現われた、ストレートロングの茶髪、ヘーゼル色の瞳をした女の子を呆然と見つめ呟いた。

クラスメイトで友達だったはずの女の子。

でも今目の前に浮かんでいるのは、背に羽のついた20センチほどの妖精だった。

「うん、リオだよ。杏子ちゃん、私ね妖精なの。あのね、夢を持ってないでいる人の手助けをするのが、私達一族の仕事なの」

リオは申し訳なさそうに説明した。

「だから私の前に現れたの? 私が両親の期待を裏切らないためだけに生きてきたから……」

杏子は義父母に育てられてきた。

両親は杏子に一流大学、殊に東大に入ることとを異常なほど強要してきた。二人とも受験に関して苦い経験をしているが故に、娘にその望みが向けられてしまったのだ。

杏子もそれに応えることでしか育ててくれた恩を返せないと思い、同世代の女の子の楽しみを何一つ知らずに生きてきたのだった。

そんな杏子の前にリオはクラスメイトとして現れ、彼女と友達に

なり、杏子が自分自身のための夢を探し出せるよう力を貸してきたのだった。

「でも杏子ちゃんはやんと夢を見つけることができたもの。だから今日はお別れ言いに来たの」

「リオ……」

「そんな悲しそうな顔しないで」

杏子はリオとの別れが避けられないと悟った。

「……ありがとう。もう会えないかもしれないけど、リオのこと一生忘れないよ、ずっと友達だよ」

杏子は泣きながら言った。

「うん、ずっと友達でいてね。杏子ちゃんが幸せになることが私の願いだから。……夢を大切に生きてね。じゃあバイバイ！」

リオは杏子の前から姿を消した。人間界の者には妖精の姿は見えない。

さっきのリオのように妖精の力を使わなければ人の目には写らないのだ。

ただし存在はしている。壁にぶつかれば痛いし、火の中に飛び込めば焼けてしまう。

リオもそのことは当然知っているのだが……。

杏子の部屋を姿を消してから飛んだまでは良かったが、窓から出てまもなく隣のアパートの駐車場に植えられた広葉樹の枝に羽を引っかけてしまったのだ。

ビリツという嫌な音とともに、リオはバランスを崩し墜落した。

「いったーい！」

落ちた痛みでリオは大声をあげた。

咄嗟に羽をばたつかせたとはいえ、落ちたのだから痛いものは痛い。

リオは破れた左の羽を見た。

「どーしよう。こんなんじゃ飛べないよ」

羽が治るには三日程かかる。リオはこれからどうしようか考えていた。

そしてふと気づく。羽をなくした妖精は、人間界でもその姿を隠せなくなることに。

「やだっ、私消えてない！」

こんな姿人間にでも見られたら大変だ、とリオは辺りを見渡した。そして絶句する。

(人が……いる)

自分の正面に、車から降りて鍵をかけた手を止めたまま目を点にして立ち尽くしている青年が一人。

(見られた!?)

リオの背中に冷や汗が滑り落ちる。羽が傷ついているから飛んで逃げることもできず、姿を消すこともできない。

そうこうしているうちに青年がリオに近づいてきた。そして両手でひよい…とリオをすくいあげたのだった。

「驚いた。本当に生きてるんだ。こびと…じゃないよな。もしかしたら妖精かな。ピーターパンのティンカーベルみたいだし。…あーあ、羽が破れてる。痛い?」

リオは普通に話しかけてくる青年をきよとんと見上げた。

(この人、気味悪がったりしてない。ううん、むしろ心配してくれてるの?)

リオに青年の穏かで純粹な心が伝わってくる。

「どう手当てすればいいのかなあ。包帯巻くわけにもいかないし…。人間の消毒液つけていいのかなあ」

リオは青年の困った様子にクスツと笑ってしまった。

「平気よ。三日も経てば自然と治るから」

「でもそれじゃあ帰れないだろ。三日間どうするつもり?」

リオは言葉に詰まってしまった。行くあてなどないからだ。

「良かったら俺ん家来る？ そのアパートで一人暮らしだから他の人に見つかる心配ないし」

青年のありがたい申し出に、リオの心が揺れる。

「いい……の？」

「もちろん」

青年が目を細めて笑って頷いた。

その笑顔はリオの心を熱くした。

しかしリオはまだそれが何なのか気づきもしないのだった。

*

*

*

「俺、あつすがわてるや有栖川輝哉。21歳の大学3年生なんだ」

輝哉はリオを部屋へ連れ帰り、リオをテーブルの上に乗せた後自己紹介を始めた。

「私はリオ。人間の姿してる時は尾崎里央おのって名のってるの。妖精界の中でもセルト族って部族出身なの」

「セルト族？」

輝哉は妖精に部族があるのを初めて耳にした。

リオも人間が妖精を一纏めに考えていることを知っていた。これから三日間とはいえ、世話になる相手だからリオは詳しく話そうと思った。

何より輝哉の人柄がリオの心を開かせた。

「妖精界にも人間が考えてるような界層があるの。主に三つあってね、天上界にあたるのが妖王界。つまり妖精の王族の住む世界。で地上界にあたるのが私の住む妖使界。で冥界にあたるのが妖冥界。妖精の死後の世界ってところかな。妖使界には色々な部族があって例えば私のセルト族は心の淋しい人間に夢を持ってもらえるよう手助けするのが仕事なの。他に人間ってよくおまじないするでしょ。その願いを叶えてあげられるようにする部族だってあるんだよ」

リオはテーブルに腰掛け、足をブラブラさせながら楽しそうに説明した。

「夢を持ってもらえるように……って、どうするの？ 魔法でも使うわけ？」

輝哉の言葉にリオは首をすくめた。

「まさか。人間としてその子に近づいて、話を聞いたりして導いてあげるの。大抵の人は誰にも本心が言えずに苦しんでいる人だから……妖精っていつても万能じゃないんだよ。セルト族は人間の姿になつたり、寝てる時の夢を操ったりする力があるくらいなもの。羽を痛めたり、万一命を落とすと姿を隠すこともできないの。あ、でも人間の姿になることはできるよ。人間界で今回みたいな緊急事態

があつた時、人間として暮らせるようになって、王様がその力は残してくれたんだ」

リオは、ほらつとでもいうように人間の姿になってみせた。もちろん背中の中の羽は消えている。

「すごい。本当に人間にしか見えない」

輝哉の単純に驚く様がリオの笑いを誘う。

(こんな人、あまりいないよ。得体の知れない私を助けてくれたり、妖精の話を通じてくれるんだもん)

子供ならいざ知らず、20歳を越えた大人の部類に入る青年が、自分の存在を受け入れてくれることにリオの心はウキウキしていた。

リオは口に指を当てて、ちょっと考える仕草をする。

「私、このまま人間の姿でいた方が都合いいのかなあ。でも体が大きいと場所もとっちゃうし……」

今度は輝哉が笑みを漏らした。

「俺はどっちでもいいよ。リオちゃんのいい方で」

リオはふと、輝哉と対等でいたいと思った。輝哉と同じ視点に立ちたいと。

「……人間の姿でもいい？」

「もちろん」

輝哉は嫌な顔をするどころか、即答で返事をくれた。

リオは素直に喜んだ。

しかしリオは後で考えることになる。

一人暮しの部屋なら妖精のままにいる方が小さくて誰の目につく心配もない。人間の姿の方が女の子を連れこんでると近所の人と思われるので、輝哉に迷惑かけるのではないかと。

そんな不安も、リオは持ち前の前向きさで否定する。

(いざとなったら妹で切り抜けようっと)

*

*

*

次の日、輝哉はブランチを済ませると、どこかへ出掛ける準備を始めた。

「輝哉くん、どこか行くの？ 学校？」

輝哉はふと髪をとかす手をとめ、リオを振り返った。

「大学は今春休み中。今日はちょっと病院に……」

「どこが悪いの？」

「いや……」

口ごもる輝哉。その顔が僅かに赤くなっていることにリオは気づいた。

何を照れているのか。そこまでは分からなかった。

「見舞いなんだ」

ポツリと輝哉が呟いた。

その一言で漸くリオはピンとくる。

「もしかして恋人の？」

言い当てられて輝哉は益々顔を赤くし、俯いたまま頷いた。

(今時の人にしては珍しい反応。本当に純粹なんだ)

そう思う一方で、リオは心に刺が刺さったような痛みを感じていた。

リオはこの痛みの原因が何なのか、見当もつかなかった。

「一緒に来る？」

「え!？」

輝哉の思ってもみない言葉に、リオは一瞬自分が誘われたことを理解できなかった。

恋人の見舞いにおまけがついて行っていいものかどうかリオは戸惑った。

男友達ならまだしも、女の子を連れて行って彼女が悪い気しないのだろうかと思った。

「リオちゃんを弥生ちよひに紹介しておきたいんだ」

輝哉が何を考えているのか、リオには益々分からなくなった。

ただ輝哉の恋人がどんな人が、興味が湧いてきた。

「一緒に行く！」

リオは頷いた。

*

*

*

やがて準備の整った輝哉は、リオを連れて家を出た。

病院までは車で20分の距離である。

助手席に座ったリオは、ハンドルを握る輝哉の顔をぼーっと見ていた。

「どうしたのリオちゃん。さっきから俺の顔ばかり見てるけど、何か付いてる？」

言われてリオは慌てて前を向く。

「うっん……別に」

リオは頬がほのかに熱くなるのを感じていた。

自分がなぜ輝哉を見つめていたのか分からなかった。言われて初めて彼を見ていた自分がいたことに気づいたくらいだ。

（何か……いつもの調子じゃないみたい。羽が破れているせい？）

リオはまさかそんなことはないと考え直す。

羽が破れたら妖精本来の力は失うけれども、気分的なものまで支障がでてくるとは聞いたことがない。

リオは何か話題を……と思いつきぎまに口を開く。

「輝哉さんと弥生ちゃん、いつから付き合ってるの？」

「そ、……それは」

いきなり聞かれて、輝哉はさつと頬を赤く染め口ごもった。

もう少しで急ブレーキをかけそうな勢いだった。

「弥生ちゃんってどんな子？　輝哉くんが選んだ人だから、可愛らしい子だと思うんだけどなあ」

リオは想像した。

輝哉の真つ直ぐで穏かな包容力のある性格からすると、同じように純粹さのある、守られるタイプの子ではないかとリオは思った。

「素敵な子だよ。今の俺があるのは弥生のおかげだから」

意外な答えに、リオは反射的に輝哉を見た。

輝哉も一瞬リオを見て二人の視線が交錯する。

（何だろう。胸が痛い……）

彼女のことを思っている輝哉の瞳が切ないほどに優しくかった。

（すごく……好きなんだね）

リオはまるで自分に言い聞かせるように胸の中で呟いた。

「弥生と出会ったのは4年前。俺が高校2年で彼女は16歳の時」

いつもの調子に戻った輝哉が、リオの質問に答えだした。

宝物の箱から一つ一つ取り出すように大切に話を始めた輝哉を、
リオはただそつと見つめる。

「俺ね高校、サッカーの特別推薦入学だったんだ。全国でも名門校
でさ、部員は皆寮生活で管理されてたぐらい。俺、1年の終わりに
はレギュラー取れて、行く末はプロか…とまで周りに注目されてた
し、俺自身ももちろんそう考えてた。……でも2年のある時、練習
試合中に、俺、左足に大怪我したんだ」

車が赤信号で停止する。

輝哉はふとリオを見た。輝哉は当時のことを思い出したのか、その辛さが瞳から滲んでいた。

「医者からはリハビリで普通の生活や遊びくらいの運動はできるよ
うになるけど、激しいのは無理だって言われた。プロどころか高校
の部活も無理だって。小さい頃から目標がサッカーしかなかった俺
だから急に目の前が真っ暗になってさ。自暴自棄って言うのかな、
……すごく荒れてね。病院抜け出したり、怪我して入院してるって
いうのに、未成年だしスポーツマンだからって手を出したことのな
いタバコや酒を始めたりもした」

リオは信じられない思いで輝哉を見つめた。

今の彼の姿からはそんな想像もできないことだった。

輝哉は信号が青に変わったのを確認すると、再びアクセルを踏んだ。

「ある日病院の裏でタバコ吸ってた時、同じ病院に入院していた弥
生に出会ったんだ。弥生はただ、俺の隣にずっと静かに座ってた。
そんな彼女の存在が温かくて、俺は自分のことを話してた。彼女は
無言だったけど俺の話に真剣に耳を傾けてくれてさ、やがて話し終
えた俺に彼女は言ったんだ。『生きていくのって辛いけど、素敵な
ことだよな』って。俺、ガツンと頭殴られた気がして、彼女の前か
ら逃げるように立ち去ってた。でも忘れられなくて看護師さんに聞
いたら、弥生は小さい頃から心臓が悪くて入院を繰り返していて、
いつ命がなくなっちゃったっておかしくない状態だって教えられて……。
自分がちっぽけな存在に思えた。それからもう必死で、弥生に認

めてもらおうとリハビリに励んでさ、そんな俺の傍にいつもいてくれたんだ」

やがて車は病院へ着いた。

エンジンを切った輝哉は最後に一言付け加えた。

「俺にとって弥生は夢をくれた妖精なのかもしれない……」
と。

(1) (後書き)

「君の笑顔を守りたい」をお読み頂きありがとうございます。

「小説家になろう」二作目の投稿です。

感想お待ちしております。

(2)

「今日もお見舞い？ 弥生ちゃん待ってたわよ」

病室へ行く途中、顔見知りの看護師に会った輝哉は声を掛けられた。

「はい。……変わった様子ないですか？」

「ええ、落ち着いてるわ。明後日手術だけど……しっかりしてるわ」

リオは輝哉の袖を引っ張った。

「弥生ちゃん、手術するの？ ……そんなに悪いの？」

輝哉は一瞬困った表情を浮かべた。

看護師と目を合わせ、輝哉は小さく頷いた。

看護師は軽く会釈をしてその場を去っていった。

輝哉はリオを連れて人通りの少ない廊下の隅へ移動した。

「弥生本人も知ってることだけど、今回の手術の成功率は30%。失敗すれば命を亡くす」

輝哉の感情を押し殺した声がりオの耳に届く。

リオは自分の耳を疑った。

「弥生ちゃんが死んじゃうってこと、……ないよね？」

輝哉は無情にも首を振った。

リオは小さく「そんな……」と呟くことしかできなかった。

「今回の機会を逃したら次はもっと成功率は低くなる。いや、手術できないかもしれない。体が耐えられないんだって。手術しなければ数年は生きられるけれど、今度大きな発作を起こしたら危険なんだ。かといって手術をして失敗したら、その数年の命さえ奪われてしまう。医者から告知された時、弥生は俺に言ったんだ。俺と共に生きていきたい。そのためだったら戦えるって」

輝哉の表情に影が落ちる。

弥生が精一杯戦っているというのに自分は彼女に何もしてやれない。それが歯痒かった。

「弥生ちゃんが羨ましい」

輝哉はリオを凝視した。リオの言葉が意外だった。

リオはそんな輝哉を見て目を細めた。

「誰かをそんなに愛せること、一生かけてもできない人だっただくさんいる。たとえ何十年、何百年生きてもね。弥生ちゃんはまだ20年しか生きてないけど、もう愛せる人を見つけたのよ。それってすごいことだと思う」

輝哉はリオから顔を逸らした。

「……でも俺、何も弥生にしてやれない」

リオは両手を伸ばす。輝哉はビクツと一瞬身を竦めた。

輝哉はリオを見て目を見開いた。

リオの強い眼差しが輝哉の息を止める。

リオに両手で頬を包まれた輝哉は、その力強い瞳を前に身動きが取れなくなっていた。

「もつと自信をもつて。輝哉くんの存在そのものが弥生ちゃんの生きる力になってるのよ。輝哉くんが精一杯生きることが、弥生ちゃん力の力になってるの！」

輝哉は暫くじっとリオを見つめていた。リオも目を逸らそうとはしなかった。

ふと輝哉の顔に笑みが浮かぶ。

「ありがとう。リオちゃんの人を元気づける力、分かった気がする」

輝哉はすっきりした顔で言った。

リオにも笑みが零れる。

（もう大丈夫だよね）

いつもの様子に戻った輝哉を見てリオは胸を撫で下ろす。

安心感と共に嬉しさが込み上げる。リオは輝哉の穏かな笑顔を見るのが好きだった。

人間の笑顔にこれほどまで惹きつけられたことはなかった。

いつだって笑顔をあげる側にいたリオ。笑顔を貰う側など経験したことがなかった。

輝哉の笑顔が、リオの心に一等星のような光を灯す。

リオはその光が洩れないよう、大事に胸に手を当てた。

(嬉しい、嬉しいのに……なぜ切なさを感じるの?)

リオは自分の心がその答えにブレーキをかけているのを感じていた。

結論を出してはいけないと、警告を発していた。

「病室、行こうか」

「う、うん」

我に戻るリオ。気を取りなおすように、リオは輝哉に向かって大きく頷いた。

「行こう、弥生ちゃんに会いに」

リオは輝哉の後に続いて廊下を歩き出した。

リオはもう一度手を胸に当てる。

(知らないことがいっぱいってこともあるもん。輝哉くんのあの表情を見ただけで良かったって思おう)

「ここだよ」

輝哉の声にリオは顔をあげる。

「どうかした？」

リオの強張った表情に、輝哉は問いかけた。

「どうもしないよ」

リオは何でもないふりをして言った。

輝哉も「そう…」と答えただけで、リオに背を向け扉をノックする。

「はい、どうぞ」

弥生と思われる声が返ってきた。

(何て爽やかな声なんだろう)

緩やかな風が新緑を通りぬけるようなそんな感じの声だった。

(輝哉くん以上に純粹に生きてきた人かもしれない)

そう思った。その答えが的中したことにリオは気づく。

病室に入り輝哉の恋人弥生を目にしたリオは、彼女の持つ雰囲気を見抜いた。

病人とは思えない芯のしっかりした姿。一杯生きてきたその力が、今の彼女を創っていた。

(弥生ちゃんは守られるだけの人じゃない。守る人でもあるんだ。輝哉くんが守るだけじゃなくて、お互い守り、守られてるんだ)

とても太刀打ちできないと思った。

(太刀打ち……？ 何に？ どうして？)

自分に湧き上がった感情をリオは持て余す。

「弥生、体調の方どう？」

「うん良好だよ。ねえ、あの子誰？」

弥生の声が自分に向けられたリオは弥生の傍に歩み寄る。

「私、……輝哉くんの親戚だよ。ちょっとの間お世話になってるの」

輝哉の恋人なら妹がいないことを知っているとしたりオは、機転を利かせ親戚と答えた。

それが一番無難な答えだと思ったからだ。

「違うよ」

リオはその声に驚いて声の主を見た。

輝哉は真っ直ぐな瞳をリオに向けていた。

「弥生には何一つ嘘はつきたくないんだ。彼女にだけは本当のこと伝えたい。いいかな？」

リオはその視線に射抜かれていた。

(そんなに大切なんだね……)

輝哉の弥生を思う気持ちと、弥生の純粋さにリオは頷くしかなかった。

「いいよ。他の誰より、弥生ちゃんなら」

「ありがとう」

輝哉はあの笑顔をリオに返した。

輝哉は本当に包み隠さずリオのことを話した。

妖精であること。リオがなぜ輝哉の世話になっているのか。妖精の世界についてさえも弥生に打ち明けていた。

リオの思った通り、輝哉同様弥生もすべてを信じた。

「私も一度でいいから空を飛んでみたいな。自由に、どこへでも行けるなんて素敵ね。羨ましい」

「行けるよ。手術頑張ったら自由にどこへだって行ける。空は飛ばせてあげられないけど、飛行機に乗って遠くへも行けるようになるんだよ」

入退院を繰り返してきた弥生にとって、自由な生活は憧れだった。

それを感じとってリオは弥生を励ましていた。成功率は低いと分かっていても、夢を、生きる力を少しでも持つてもらいたいと思った。

「弥生、手術頑張ろう。ずっと傍にいるから。ずっと祈ってるから、決して諦めたりしないでくれ」

輝哉は弥生の手を握り締め、真剣な眼差しを真っ直ぐ弥生に向けた。

「諦めたりしない。輝哉くんの傍にいたいから、絶対諦めないよ」

弥生も笑顔を、力強い瞳を輝哉に返す。

(とても……とても入りこめない)

リオは胸に握り締めた手を当てた。足はすくんでいた。

(胸が苦しい。痛い。どうして……!?)

わけの分からない感情にリオは振り回されていた。

ただ目の前のあまりに自然に溶け合っている二人の姿から目を離せなかった。

(私の方も見てほしい)

そう思った自分にまた疑問が湧く。

あの笑顔をもう一度自分に向けてとリオは願っていた。

その瞬間、リオの心に出会ってからの輝哉の顔が、言葉が次々とオーバーラップした。

リオの胸に当てていた手が力なく下がる。

「私、ちょっと外行ってくる。輝哉くん、ゆっくりしておいでね」

リオは硬い表情を無理に笑顔に変え病室を後にした。

リオは足早に歩き中庭の木陰に身を隠すと、力なく崩れるように座り込んだ。

(私、……どうしよう)

ずっと胸が警告していた。感じていたはずなのにと後悔しても、もう遅かった。

(私、輝哉くんを好きなんだ)

とうとうリオは気づいてはいけない想いに気づいてしまったのだった。

* * *

弥生の手術前日、リオの羽の治る前日でもある2日目。リオは近所買い物に行っていた。

輝哉は弥生の見舞いへ行って留守である。

リオも誘われたが、弥生と輝哉の二人の時間の方が大切だからと断っていた。

それは嘘ではないが、二人のあの姿を再び見るのは自分の想いに気づいてしまったリオには酷なことだった。

弥生のことを憎めたら、嫉妬できたらまだ良かったのかもしれない。けれどもそれすらできないほど、二人一緒にいるのが自然だったのだ。

リオに残されたのは、諦めること、忘れること。ただそれだけ。

(妖精が人間に恋するなんて、そこからもう叶うことなんかないのに、私もバカだなあ)

リオは自嘲的な笑みを浮かべた。

(もっとバカなのは、弥生ちゃんを想ってる輝哉くんを惹かれてるってことなのかな)

弥生を一番大切にしている、守ろうとしている、そんな輝哉の姿がリオは切なくなるのに好きだった。

「……リオ、なの？」

聞き覚えのある声が出て、リオは俯いていた顔をあげた。

「杏子……ちゃん」

一昨日別れたばかりの少女、杏子が反対側から歩いてきていた。

杏子は嬉しそうにリオに駆け寄ってきた。

「もう会えないって思ったのに嬉しい。この近くでお仕事なの？」

「うん。実はあの日杏子ちゃんと別れてすぐ、杏子ちゃん家の隣の駐車場にある木に羽引つ掛けちゃって、ちょうどその場にいた人に助けられたの。で、治るまでその人のうちに居候中」

「居候って、その人リオの正体知ってるの？」

「うん。すごく純粹で優しい人なの。だから話しちゃった」

杏子はリオの初めて見せる表情に少々驚いていた。

明らかに恋心を胸に秘めたりリオを前にして、杏子は自分以上にリオに幸せになってほしいと願わずにはいらなかった。

「ねえ私の家にちょっと寄ってかない？ リオとはもっとゆっくり話したいの。あの時のお礼も充分してないし」

「……お礼なんて別にいいけど。そうだね、杏子ちゃんと再会できたのも何かの縁だね」

リオは笑顔でOKした。何よりも杏子の明るさがリオには嬉しかったのだ。

彼女のそんな様子をもっと見ておきたいと思ったのだ。

その場から僅か5メートル先が杏子の家だった。

杏子の部屋で彼女がお茶を取りにいっている間、リオは部屋を見渡した。

以前は勉強道具しかなかった重苦しい部屋が、今では明るく色づいて見える。

(よかった。杏子ちゃん幸せそうで)

妖精として、セルト族として、この仕事をやっていて良かったと思う瞬間をリオは噛み締めていた。

「おまたせ」

杏子が紅茶とクッキーを持って部屋へ戻ってきた。

「ありがとう」

二人は床の上に向き合って座る。

「杏子ちゃん、頑張ってるみたいだね。嬉しいな、杏子ちゃんが元気でいてくれて」

「それもリオのおかげだよ。私が今こうして自分の足で立って生きていられるのも、みんなリオがいてくれたから。本当にありがとう」

リオは笑顔で首を振った。

「違うよ。私はきつかけを与えただけだもん。杏子ちゃんが両親や自分とちゃんと向き合えたから乗り越えられたんだよ」

「でもリオがいてくれなかったら、私ずっと逃げてた。自分を殺してた。本当、感謝してる。だからリオには幸せになってもらいたいたいと思うよ」

杏子の真剣な眼差しにリオは紅茶を飲みかけた手を止める。

杏子はさつき言おうとしたことを口にする。

「リオ、同居してる人のこと……好きになったんでしょ？」

リオの息が一瞬止まる。

リオは静かにカップを置いた。口の端には苦い笑みが零れていた。

「そんなに顔に出ちゃってたんだ……」

「ごめんね。でもさつきその人のこと話すリオがすごく女の子らしかったの。私、リオには幸せになってほしいの。何か私にできることがあったら言って！」

リオは杏子の自分を思う気持ちが嬉しかった。だがそれに応えられなかった。

ただ首を振るだけ……。

その様子に杏子の胸が痛んだ。

リオの切なげな顔が、彼女に片想いであることを悟らせる。

「人間と妖精だから？」

リオは答えるのを躊躇った。

住む世界が違う。確かにそれも大きな問題であることに変わりはない。だがそれだけではないのだ。

リオは正直に伝えようと杏子を見つめ、泣きたくなくなるような微笑を浮かべた。

「それもあるよ。でも輝哉くんにはもう恋人がいるの。二人でいるのが自然で、どちらかが欠けるなんてありえない。……そう思えるぐらいなの。奪おうとか、嫉妬するとか、そんな思いにもなれない。私の想いはずっと永遠に一方通行でしかないの」

「リオ……」

杏子はリオの切ない胸の内を知り励ます言葉がなかった。

「そんな顔しないで。確かに羽は明日には治って私はあの家から出

ていくけど、人を愛せたこの想いは私の一生の宝物だよ。あと一日で一生分の思い出を作るんだから。私はこの想いを糧に生きていく」

リオの悲愴な決意に、杏子は思わず涙が零れた。

「辛かったり苦しくなったらいつでも私のところに来てね。励ましてあげられないかもしれないけど、一緒に泣くことはできるから。リオの力になれるんだったら何でもするからね」

杏子はリオを抱きしめた。リオを守ってあげたいと思った。

「ありがとう、杏子ちゃん」

(一緒に泣いてくれただけでもう充分だよ。ありがとう)

杏子の温かい思いが、リオの心を満たしていった。

* * *

その日の夕食後、風呂上がりの輝哉は近くのコンビニまでビールを買いに出掛けた。

普段は酒はあまり飲まない輝哉だが、明日の手術のことを考えると落ち着かないのだ。

そんな輝哉を見て、リオは心底手術の成功を願わずにはいられない。

もう一度笑顔を見せてくれるのなら、たとえそれが自分に向けら

れたものでなくてもかまわなかった。

そんな時ベランダからガラスを叩く音がした。

「ソラ、どうしたの!？」

リオの幼馴染みの妖精がガラス越しに浮かんでいた。

同じ部族の仲良しの男の子の姿に思わず心が和む。

リオは窓を開け迎え入れた。

「さつきからずっといたのに気づかないんだもんな。たまたま様子見にきたら人間の世話になってるようだし。あいつ、お前のこと知ってるみたいだな」

「うん。羽怪我して落ちたところ、目撃されちゃって…。治るまでここにいていって」

「お前もうちよつと警戒心つてもものないのか？ 相手は男なんだぞ」

「平気よ。輝哉くん、素敵な彼女いるもん」

「だつてお前……」

ソラは言葉に詰まった。

しばらく外から眺めていたリオの輝哉を見つめる視線。その中に秘めた想いをソラは感じ取っていた。

片思い以上にはなり得ないとリオの覚悟を思い知る。

「お前ちゃんと怪我治ったら帰ってくるんだろっな!? 気持ちの整理、つけられるんだろっな!？」

ソラの言葉にリオは目を大きくする。

ソラにも自分の想いがバレってしまったことを知った。

「明日中には帰るから心配しないで。大丈夫、絶対帰るから……」

リオは笑顔で答えた。しかしその切なげな瞳はソラの心に痛みを残した。

「ただいま!」

輝哉の戻ってきた声がした瞬間、ソラはベランダへとその姿を消した。

リオは一瞬ソラの姿を探したが、もういないと思い輝哉といつもとおり何気ない会話を交わす。

決して自分の想いを悟られないよう、つとめて明るく……。

「お前、バカだよ」

ガラス越しにその様子を見ていたソラは小さく呟いた。

(3)

弥生が手術室に入って数時間が経過しただろうか。

手術室の前に弥生の両親と輝哉が沈痛な面持ちで長椅子に腰掛け、時折いたたまれず辺りをうろろろしていた。

苦しそうに口を真一文字に結んだ輝哉の横で、リオはそっと輝哉に話しかける。

「あのね私、弥生ちゃんの手術終わったら帰るね。もう羽は完治してるけど、輝哉くん達と一緒に祈ってたいの、弥生ちゃんの無事を一人でも願う心が多ければ、きつと願いは届くから……」

輝哉はそっと瞳を細め切なげにリオを見た。

「そうだな……」

そして再び廊下に静寂が広がる。

遠くから微かに聞こえてくる声と、たまに辺りを歩く足音が響く状態のまま、時間だけが更に経過していった。

突如リオの体がビクツと震え、驚いた眼差しを手術室の扉へと向けた。

「どうかした……?」

リオの様子に輝哉が問う。

リオは凍りついた表情で輝哉を見つめる。唇が微かに震えていた。
(弥生ちゃんの生命力が急激に弱ってきてる。このままじゃ……)

そう、……妖精には感じる事ができるのだ。生命力のかなり弱まった魂を。

命の灯火が消えようとしているこの瞬間を……。

この感覚が妖精としての仕事を探し出してきた。例えば自殺願望を抱えている魂を感じたりなど、人として救える範囲で生命力の弱い人間を助けてきた。

でも今回のように病気や事故で消えようとする命は、感じることはできても救えはしない。

リオはこんな状況に出くわすといつも思う。自分は無力だと。

「輝哉くん、ちょっと来て！」

リオは輝哉の手を引っ張り、弥生の両親達と少し距離を置いた。

「どうしたんだよ、リオちゃん」

戸惑う輝哉にリオは向き直り、真っ直ぐ瞳を見つめた。

「落ち着いて聞いて。弥生ちゃんの生命力、かなり弱ってきてるの。たぶんもう、そんなにもたないと思う」

輝哉はリオを凝視した。

「嘘……………だ」

「嘘じゃない。私達にはそれが分かるの」

「嘘だ。……………信じない、そんなの」

そう言った輝哉の瞳からは、大粒の涙が溢れ出していた。

口では否定しながらも、心の中では人間でない妖精のリオの言葉を肯定していた。

（私は輝哉くんは何をしてあげられるんだろう。こんなこと今伝えただって、受ける悲しみの度合いに変わりはないのに……………）

「俺、無力な自分が悔しい。あいつは俺を助けてくれたのに、俺にはあいつを助ける術がない。あんないい子よりこの俺の命を絶つてくれ！」

噛み締めた口から、握り締めた両の拳から血が滲み出していた。

（このままじゃ本当に自分の命を絶ちかねない！）

リオは悲しみに沈む輝哉を見つめた。

ふとその表情にリオの大好きな輝哉の笑顔が重なる。

あの笑顔を取り戻してくれるのなら……………と、リオの胸にある考えがよぎり、それはすぐさま決心へと変わる。

「輝哉くん、弥生ちゃんを救える方法がたった一つだけあるの」

輝哉は瞬間、すがる様にリオを見つめた。

「その前に確認させて。輝哉くんは弥生ちゃんをずっと大切にできると誓える？」

「もちろん」

「もう一つ。私、あなたの笑顔が大好きなの。だからいつまでもその笑顔を忘れないでいてくれる？」

輝哉は噛み締める思いでゆっくり大きく頷いた。

リオは吹っ切れたように、輝哉に清々しい表情を向けた。

「私の命を口移しで弥生ちゃんに分ければ、きっと手術は成功するはずよ」

リオが何気なく言った一言に、輝哉の心は動揺を隠せない。

「命を分けるって…リオちゃんは大丈夫なのか、そんなことして」

「平気。妖精の命は2000年もあるから少しぐらい大丈夫なの。それに輝哉くんにはお世話にもなったし、恩返しってことで」

納得しない輝哉に、リオは力強い眼差しを向ける。

「まだ事を大きく感じてるなら、弥生ちゃんを守って幸せにしてあ

げて。それを私に見せてよ」

「……分かったよ。弥生を頼む」

「任せて！」

その時新たな患者が手術室に運ばれてきた。これから空いている第2手術室で行われるらしい。

彼らに付いて手術室の扉をくぐろうと思い、リオはすぐさま妖精の姿になる。

姿は透明でも、扉は開かなければ通れないからだ。

「じゃ、行ってくるね」

「リオちゃん……ありがとう」

明るい声に輝哉は答えた。

リオは弥生のもとに向かいながら、輝哉の笑顔を思い浮かべた。

*

*

*

何とか弥生の手術室に潜入し、たった今命が消えようとしている弥生の枕元にリオは飛んでいた。

そして透明なまま人間の姿へと変わる。

(弥生ちゃん、輝哉さんと幸せになってね)

リオは純粹にそう思った。もうどこにもいられない自分の分ともにも……。。

リオは輝哉に二つの重大なことを隠していた。

妖精の命が2000年といってもそれは妖王界の王族のことで、自分達は2000年程であること。

そして人間に自分の命を与えることが罪であること。

その罰は魂の消失、つまり転生することもなく、魂そのものが抹消されるのだ。

リオだって簡単に決意できたわけではない。できていたら手術の前から弥生にずっと付いていたし、輝哉にも「安心して」と真っ先に伝えていたはずである。

弥生の命を、輝哉の絶望する姿を目の当たりにした時、リオの決心は固まった。

自分の命と引き換えにしても、輝哉の笑顔を、その源である弥生を守りたいと。

ただ輝哉には自分のことで心を痛めてほしくはなかった。真っ直ぐな心の輝哉にできれば嘘なんてつきたくはない。けれどこの先自分を辛い思い出しにしてほしくないとリオは願っていた。

リオはそつと呼吸器に触れる。

(輝哉くんのこと、幸せにしてあげてね……)

リオは僅かな隙間を作り、そこから息を吹き込むようにして、自分の命を注ぎ込んだ。

リオが顔を上げると同時に、医師の驚きの声が響く。

「血圧上昇、状態安定してきました」

「本当か!？」

執刀医がモニターを確認すると、確かにそこにはさきほどまで低下していたものが、正常値に近い数字になっていた。

「奇跡だ。これならもちこたえられる、救える！」

医師の目の端から安堵感が窺える。

(もう大丈夫だね、よかった)

リオも安心し、事の成り行きを見守ろうと妖精の姿に戻り弥生の枕元にちょこんと腰掛けた。

それから一時間程経過して手術は終了した。もちろん成功である。

弥生の状態はこのほか安定を保っていた。

手術室の扉が開いた瞬間、両親と輝哉が医師に駆け寄る。

「成功ですよ」

その一言が皆の緊張の糸を緩め、涙を溢れさせた。

「ありがとうございます、ありがとうございます！」

何度言っても言い尽くせない感謝の言葉が皆の口から漏れた。

やがて医師が去り弥生が運ばれてきた。むろんまだ麻酔のために目を開けることはない。分かっているながら誰もが彼女に語りかけた。

リオは廊下の陰で人間の姿になりその様子を見つめていた。

（これでよかつたんだよね？）

自分に問いかける。

（よかつたんだよ。後悔はしない。たとえ何があっても……）

もう一つの心が答えた。人を愛せただけで充分幸せだったと。

弥生を見送った後、輝哉がリオに気づいて歩み寄ってきた。

輝哉は両手でリオの両手を包み込んだ。

「ありがとう。リオちゃんには何て感謝すればいいんだろう。どうお礼したら……」

「お礼なんて……。そうだ、私もう帰るから最後にもう一度輝哉くんの笑顔を見せてくれるかな？」

輝哉はそんなことでいいのかと思ったが、自分を見つめるリオの瞳に真剣さを感じ、承諾する。

輝哉は目を伏せ、ゆっくりあけるとともにリオの望んだ出会った時の笑顔を彼女に向けた。

「……………ありがとう」

リオは見納めとなる彼の姿を心に焼き付けるように呟いた。

「もう弥生ちゃんのところ行ってあげなよ。きっと待ってるよ。…
…ここでバイバイ、しよ」

その言葉に輝哉はリオの手を握る両手に力を入れた。

「本当にありがとう。リオちゃんのことはずっと忘れない。この三日間、妹ができたみたいで楽しかった。ありがとう、さよなら!」

輝哉は振り切るようにして、弥生の方へ駆けていった。

(私の方こそありがとう。人を愛する心を教えてくれて……………)

リオも立ち去ろうとふと後ろを振り返った時、そこに立ち尽くしている人物を見て息を呑んだ。

「なかなか帰ってこないと思って来てみれば、……………お前、何してたんだ?」

ソラの押し殺した声が響く。

「あ、あの今から帰るところで……」

ソラのただならぬ様子に、リオの言葉がたどたどしくなる。

「何してたんだって聞いてるんだ!!」

怒りの声に、リオはビクッと肩を縮めた。

(ソラは知ってる、私のしたことを!)

とても言えない……と、リオは唇を噛んだ。

「あいつは知ってるのか？ お前がどうなるか知ってて、お前に頼んだのか!？」

リオはただただ首を横に振って答えるだけだった。

「あいつ、許せねえ」

「ま、待って、ソラ!」

輝哉のもとに駆け出そうとするソラの腕をリオは咄嗟に掴んだ。

「離せよ! あいつ、ぶんなくってやる。自分のしたこと分からせてやるんだ!!」

「やめて、お願い!」

それだけは駄目だと、リオはソラを懸命に引き止める。

自分がどうなるか……それを輝哉が知ったら、輝哉の心に一生傷を残すことになる。

彼の心の傷になんかなりたくない。自分が彼から笑顔を奪う原因にはなりたくはなかった。

「彼は……輝哉くんは何も知らない。私が強引に輝哉くんを説得してやったことなの。だから彼を責めないで。彼に言ったらソラのと一生許さないから！」

ふと、ソラ力が弱まった。

振り返った彼の目とリオの視線が重なる。

「お前、そんなにあいつのこと……好きなのか？」

切ない瞳だった。

「このままじゃお前、消えちまうんだぞ。それでも……いいのかよ？」

ソラのやり切れない思いが伝わってくる。それでもリオにはソラの気持ちに応えることはできない。

「……ごめんね」

リオの潤んだ瞳を見て、ソラは改めてリオの決意が固いことを思い知った。

「どうして、自分の命を犠牲にまでできるんだよ。俺には分からない

いよ
「よ」

やり切れない思いがソラの胸をついてでた。

「心の底から人を愛した時、分かるよ」

リオは頬に一筋の涙を零しながら、微笑んでそう一言口にしたの
だった。

(4)

妖使界に戻ったりリオを待っていたのは、両親と姉そして妖王界からの使者だった。

リオは帰ってくるなり母親にがっしり両肩を掴まれた。

「リオ、あなた何をしたの!? 王様から呼ばれるなんて……」

見ると、母も姉もそして普段は無口な父でさえ泣いていた。

罪悪感がじわりと広がる。

「……禁を犯しました。ごめんなさい」

口にしたとたん、リオの瞳からも涙が零れ落ちた。

「人間に……命を分け与えました」

声が震えた。

弥生に命を分けたことに後悔はなかった。ただ家族を哀しませてしまったことがリオの胸を痛める。

家族を哀しませたくはなかった。だがリオは結果として家族よりも愛した人を選んだのだ。

「なんてことを……」

母親はしばらく言葉を失った。

そして我に返ったようにリオをしっかりと抱きしめ使者を見た。

「この子を連れていけないで。私が代わりになりますから！」

「それはできません」

使者の返事を聞いた母親は益々リオを抱く腕に力を込めた。

家族の強い愛情を感じたリオは何度も何度も心の中で謝った。

「母さん、私覚悟できてるから……」

リオはそつと母親から身を起こした。そして家族三人とソラを見渡す。

「……ごめんなさい」

そつ告げた後、リオは自ら使者の元へと歩み寄った。

使者は妖王界への扉を開く。

今まさに二人が妖王界へと踏み出そうとしたその時、リオは最後にもう一度振り返った。

「私、幸せだったよ。育ててくれてありがとう」

笑顔を残し、リオは一步を踏み出したのだった。

妖王界に着いたリオは王宮の一室へと連れられてきた。

王宮とはいっても華やかさはなく、静粛な教会の雰囲気似ている。

部屋の配置は傍聴席のない裁判所といったところだ。

リオは使者に促されるまま、中央の席へと腰をおろした。

5メートル程前には教壇のような机が重々しく置かれている。

リオの心は不思議なほど落ち着いていた。

これからきつと処罰されるだろうという時なのに、その罪をこの身体で受ける覚悟に戸惑いはなかった。

静まり返った部屋に扉を開く重厚な音が響き渡った。

そして二人の従者を引き連れ、高貴な人物がゆっくりと入ってくる。

何事もなく妖使界で暮らしていれば、恐らく一度も姿を目にすることがなかったであろう人物。

オベロン王　妖精三世界のすべての頂点に立つ、妖王界の王、
その人であった。

リオも一度だって姿を見たことはない。だが彼の持つ独特のオー

ラに、リオは机のところで立つ彼がオベロン王であることを直感した。

リオはすぐさま椅子から立ちあがり、その横にひれ伏した。

「そなたがリオか？」

威厳のある声が一瞬リオの息を止める。

「……はい」

俯いたまま、リオは一言答えた。

「顔を上げ、立ちあがるがいい」

恐る恐る言われた通りにする。リオは震えそうになる体を押さえる思いで、重ねた両手をぎゅっと握り締めた。

「今日そなたをここへ呼んだのはそなたが罪を犯したためだ。何の罪か心当たりがあるう？」

そう言ったオベロン王の表情からは何の感情も読み取れなかった。ただ真つ直ぐリオの目を見ていた。

（私、やましいことをしたとは思ってない。胸張って答えよう）

リオもオベロン王をじつと見つめる。

「はい。私は人間に自分の命を分け与えました。その処罰が魂の抹消と知っていて罪を犯しました」

オベロン王はフーと一息吐いた。

「では覚悟はできているというのだな？」

リオは目を閉じ、一度深く呼吸し、再びオベロン王を見る。

「はい」

迷いのない返事であった。

オベロン王は返事を聞くと壇上から降り、リオの元へ歩み寄ってくる。

リオは王から処罰を受けるべく、彼の前に膝き目を閉じた。

オベロン王がリオの頭上に手をかざす。リオは頭上から降ってくる王の力を感じた。

(父さん、母さん、姉さん、ソラごめんなさい。そして輝哉くんありがとう……)

最期を感じ、リオは心の中で呟いた。

だがしばらく、リオが目を開けると、そこには先程と変わらない風景があったのだ。

(……どうして？ 私、どうなったの？)

訳も分からず顔を上げると、目の前にオベロン王が立ったままで

あつた。

「あ…あの……」

不思議そうに見上げるリオの両手をオベロン王は握り、視線を近づけようとリオを立ちあがらせた。

「執行猶予をやるう」

「執行猶予？」

オベロン王は頷いた。

「確かにそなたは罪を犯した。だが少女一人の命を救ったことで、もう一つの命を助け夢を叶えたのだ。あのまま少女が亡くなっていたら、青年は間違いなく絶望し自ら命を絶っていたであろう。人間に夢を与えるというそなたの役割は果たされていた。そのことを考慮し、今回は極刑を避けることにしたのだ。だが二度目はないぞ。そなたがもう一度人間に命を分け与えることがあれば、ここに再び来ることもなく、その場でそなたは消滅する。先程の力はそのためのものだ。あと、そなたには2年間の謹慎を命じる。2年間は人間界へ行くことは許さん。よいな？」

思いがけない温情措置に、リオはその場に泣き崩れた。

「ありがとうございます」

その一言が精一杯だった。

*

*

*

リオが落ち着くのを待ち、使者はリオを連れて彼女の家へ戻ってきた。

重く沈んだ部屋に突如2人が現われた時、幻でも見るように家族とソラがリオを見た。

「リオ……なのか？」

「本当に？」

信じられない思いで呟きながら皆がリオの周りに集まる。

リオはニツコリ微笑んだ。

「ただいま！」

真っ先に彼女を抱き寄せたのは父親だった。

「もう……もう戻ってこないと思っていた。こんなことがあるのか？ 我が娘をもう一度この腕に抱けるなんて……」

リオは再び涙が込み上げてきた。父親のこんな感情を吐き出すような言葉を聞いたのは初めてだった。

リオは両腕を父親の背へとまわし、しがみついた。

「ごめんなさい。王様が極刑を避けてくださったの。2年間の謹慎と、同じ罪を犯したら今度こそ消滅って温かい措置をして下さったの」

父は使者の方へ向き直った。

「オベロン王にお伝え下さい。我が娘の命を助けて頂き、何度感謝しても感謝し尽くせませんと。寛大な措置をありがとうございますと」

「承知しました。では私はこれで失礼します」

一礼すると、使者はもと来た道をまた帰っていった。

「心配かけてごめんなさい」

リオはもう一度謝った。父親の腕から解放されたたん、今度は母親の抱擁を受ける。

こんな涙もろい母親をリオは見たことがなかった。

「おかえりなさい。もう二度とこんな思いさせないで。……お願いよ、リオ」

「うん。命……大切にするよ」

リオは心に決めていた。

もう一度生きていいということになって、これからどう生きていべきか。こんなに心配かけてしまったことをどう償えばいいのか。

それにはたった一つ、どうしても果たさなければならぬ決意があった。

リオはソラを見つめた。

「もう二度と彼とは逢わない。もう二度と家族を哀しませない。
…約束する」

(ただこの想いだけは胸に秘めていさせて。今はまだ切なさで苦し
いけど、いつかきつと一生の宝物になるから……)

本当なら忘れてしまつか、想いを凍りつかせてしまつのがいい。
それはリオにも分かっている。

でもどうしてもあの笑顔を記憶から消し去ってしまいたくなくなっ
た。愛するという心を捨て去ってしまいたくなかった。

二度と逢うことはない。それでも大切にしたい想いが、リオの胸
の中に満ちていたのだった。

(5)

4年の歳月が流れた。

リオの生活は輝哉と出会う以前の落ち着きを取り戻していた。

謹慎中の2年間はリオにこれまでにないくらい色々考える時間を与えてくれた。

家族の自分に対する愛情。それに報いるために自分に何ができるのか。

妖精として自分のすべきことは何か。妖精としての自分の役割とは……。は……。

そして謹慎中も、現在も、いつも傍で見ているソラが存在。

ソラは口癖のように言う。

「離れているとそのまま戻ってこないんじゃないかって不安になると。」

謹慎中はそれこそ毎日リオの傍を離れようとはしなかった。自分にだって仕事があるはずなのに、僅かな時間ですらリオに会いに来た。

リオが仕事に復帰した今でこそ会う時間は減ってはいるが、それでもあの事件以前よりは遥かに多い。

乱暴な言葉だけどもストリートにものを言ってくる、ケンカ友達のような存在だったソラ。あの日を境にリオに対するソラの状態が変わった。

相変わらず憎まれ口を叩いてくるが、瞳が切なげな優しさを湛えるようになった。

何でもポンポン口にするソラが唯一言わなかったリオへの秘めた想い。

今でも打ち明けたことはない。

でもこんな状況になった今になって、リオはソラのその想いに気づいた。いつ頃だろうか、自覚したのは。

(ソラは自分のできる精一杯で私を守ろうとしてくれてる……)

そう感じたのはいつだったのか。

そしていつからだろう。ソラのその想いに応えたいと思い始めたのは。

輝哉を忘れたわけではない。むしろ思い出さない日などなかった。

そのたびにリオの胸には切ない風が吹く。一体いつ、風はやむのだろうか。一体いつ、空から光が差し込むのだろうか。

(もう少し待っていて、ソラ。いつかきつとあなたの想いに応えたいの)

その時がきたら、自分からソラに告げようとリオは思っていた。

* * *

「リオの仕事、今日ぐらいに終わるんだろっ?」

商店街から大通りへの道を、リオとソラは人間のごとく歩きながら会話を交わす。

「うん。今日様子見にいつて、それで大丈夫なら任務完了」

「じくろっさん」

「ソラの方は?」

「俺? 俺の方はもう少し時間かかりそうだなあ」

「ふーん」

ソラとの何気ない会話。それが今のリオには心安らく時間だった。

郷に入っては郷に従えのごとく、人間と同じように過ごす時間はリオには大切なものだった。

人との関わりが多ければ多いほど、相手の悩みを分かってあげられるような気がした。

妖精として自分にできること。どう相手を分かって支えてあげられるか。そのために些細な事でもリオは吸収しようとした。

未熟な自分を卒業するために……。

「あ、俺本屋寄ってく。相手の掴みかけてる夢にどうやったら近づけてあげられるか、ちょっと調べてくる」

「じゃあ私あそこのアイスクリーム屋にでも行って待ってるよ。相手の家に行くの、夜の予定だし」

リオは斜め向かいのこじんまりとした可愛い店を指して言った。

「待っててくれるのか？」

嬉しそうに言うソラに、リオは笑って頷いた。

「急いで済ませてくるから！」

ソラは足早にすぐ横の自動扉の中へと駆けていった。

リオは見送ると、近くの信号を渡り、アイスクリーム屋へと歩いた。

中では学生アルバイトの女の子が感じの良い笑顔で出迎えてくれた。

注文を終え、リオはコーンの上のったアイスクリームを舐めながら外へ出る。

(天気もいいことだし、ここに座ってよっと)

店の前にあるテーブル三つばかりのテラスの一角にリオは腰掛け、

ソラを待つことにした。

(長閑そうに見える風景。……でもいつか自分を見失ってしまう人がこの中にもいるのかもしれない)

リオは時々思う。自分は本当に絶望した人間を救っているのだろうか……と。

自己満足で終わっていないかと。

(私のしていることは小さなことなのかもしれない。それでも私を必要としてくれる人がいるのなら手を差し伸べたい。小さなことしかできなくても……)

小さなことでも、いや、小さなことからでも始めなきゃ何も変わらない。

リオはそう思いながらアイスクリームにかぶりついた。

その時だった。

キキーンツという車の急ブレーキ音が鳴り響いた。

そしてドカッという鈍い音が間髪入れずに聞こえてきた。

リオは思わず立ち上がる。

弾みで転がった椅子の金属音がやたらリオの耳に大きく響いた。

リオの手から滑り落ちたアイスクリームはベチャリとテーブルに

落ちていた。

信号無視をした直進車が横断歩道で人をはねたのだ。

宙に投げ出された女性は臨月をむかえているであろう妊婦だ。

まるでリオにはスローモーションを見ているように思えた。

リオは女性のもとへ急いだ。

辺りはあっという間に人ばかりと化した。

「救急車を！」

という声があちこちから聞こえる。

リオはお腹を抱えうめいている女性を見て息を呑んだ。

(嘘……そんな……)

どうして彼女がここにいるの……とリオの胸の中に疑問が駆け抜けた。……が、ハッと我に返る。

リオは女性のすぐ傍に近寄り声をかけた。

「弥生ちゃん、弥生ちゃんでしょ！？　しっかりして！」

女性はうつすらと目を開け、リオを見て微かに頷いた。

リオは何度も何度も弥生の名を呼び励ます。

そこへ聞き覚えのある声がりオの耳に届いた。

「弥生!？」

店から用事を済ませ出てきた彼は、店の外の状況に気づき駆けてきたところだった。

「弥生!!」

彼は弥生を抱き起こそうとする。

「待つて。動かさない方がいいわ」

彼は静止をかけた弥生の傍らにいる女の子を見て驚いた。

「君は……りオちゃん!？」

りオは彼と目を合わせ頷いて言う。

「久しぶり、輝哉くん」

こんなことがあるのだろうかとりオは思った。

もう二度と逢わない。その誓いを守るために、りオは仕事に復帰した時あえて輝哉達のいる街、その周辺の街さえも避けて過ごしてきた。

それが以前とは別の街でこうして再会してしまうとは……。

輝哉は就職を期にこの街へ引越してきたのだ。その際、弥生と結婚し彼女を連れてきたのだった。

でもリオはそんなこと知る由もない。誓いを破るつもりもなかった。だが破ってしまったのだ。

リオの胸に家族に対する申し訳ない思いが広がった。

それは誓いを破ってしまったからだけではない。

(私、心のどこかで輝哉くんに再会できたこと、嬉しいと思ってる) 後ろめたかった。

だが心は正直なもの。覆い隠そうとすればするほど想いは溢れ出す。

「リオ、どうしたんだ？」

騒ぎに駆けつけたソラが人ごみを押し分け、リオ達のもとへやってきた。

「お前……」

心配そうに倒れている女性を見つめている輝哉を見つけたソラは、一瞬絶句した。

ソラの見つめる視線の先にあるものが何なのか。

「……輝哉か」

怒りを含んだ眩き。それはリオに向けられたものなのか、それとも輝哉に向けられたものだろうか。

「ソラ違う、偶然なの！」

こんな言い訳に過ぎないとリオは思ったが言ってしまった。

ましてやましい想いを抱いていると自覚してしまった今、その言葉に何の力もない。

救急車のサイレンが徐々に近づいてくる。

「弥生……？ 弥生、しつかりしろ！！」

輝哉の悲痛な叫びがリオの胸に突き刺さる。

弥生は意識を失っていた。

「リオ、来い！」

ソラはリオの手を無理やり引つ張り、輝哉から引き離そうとする。

「ソラ待って、待ってってば」

今こんな状態の輝哉を置いて行きたくはなかった。

リオの心は輝哉の心とシンクロするがごとく、次々と哀しみや不安が突き抜けていく。とてもこのまま放っておくことなどできなかつた。

「4年前と同じあやまち犯すつもりか？」

ソラの重い一言に、リオに苦い思いがじわりと湧いた。

家族にあんな思い二度とさせたくはなかった。

救急車が到着し弥生が運ばれていく。

その間にも輝哉の弥生の名を呼ぶ声がリオにも届いていた。不安から怯えたように強張った表情の輝哉。

その時、リオの脳裏に浮かんだ一番大好きな輝哉の笑顔が、ガラスが割れるようにして砕け散った。

(嫌だ、……消えちゃ嫌！)

リオは悟る。理屈じゃない。この想いを理屈で片付けることなんてできやしないということ。

「……ごめんね」

「えっ……!?」

独り言のようにリオは呟き、ソラがその意味に気づく前に姿を妖精へと変えた。

するりとソラの手から抜け出したリオは飛んだ。

今まさにドアを閉めようとしている救急車の中へ。

そしてぎりぎりリオはその中へ収まり、車は走り出したのだった。

(6)

救急車の中で輝哉はひたすら弥生の手を握り締め声をかけ続けた。リオはそんな彼の肩に座り様子を見守っていた。

(今はまだ大丈夫。でもいつ急変するかもしれない)

意識はなくとも、弥生の生命力の危うさはまだ感じられない。

このまま持ち堪えてくれれば誰も哀しませずにすむ。それが本心。でも万一弥生に死が迫れば、リオは再び罪を犯すことに迷いはなかった。

リオはちらつと輝哉の悲痛な横顔を見る。彼は先程リオと再会したことなど忘れてしまって、弥生のことしか考えられないようだった。

(皆は私の想いを分からないって言うのかな……)

想い人を救いたいから命を懸ける。……もし両思いだったら皆納得するのかなとも思う。

しかしリオの想い人は他人に心を奪われている。

その恋敵を命懸けで助けようなんて変と人は言うだろう。

今のように頭の片隅にも残らない。忘れられてしまうかもしれない。

そんな人達に命をあげる価値がどこにあるのかと、皆は非難するだろう。

それでも……とリオは思う。

(私にはあの笑顔がすべてだから)

自分の存在は輝哉の笑顔を守るためにあつた。リオはそう感じていた。

リオと輝哉が見守るなか、救急車は病院へ到着した。

色々処置を施されすぐさま弥生は手術室に運ばれる。

このままでは母子ともに危ないと、一刻の猶予も許されない状況だ。

手術室の扉が弥生と輝哉を隔てた。

重い静寂が心をより不安にする。

「……なぜ！」

苦しい思いを吐き出すように、輝哉は呟きざまに握り拳で壁を叩きつけた。

「なぜまた弥生なんだ！」

どこに怒りと哀しみをぶつけたらいいのか分からない、だが心に

留めておく限界を超えてしまった輝哉は押さえきれない思いを吐き出さずにはいられなかった。

「神様が自分の手元に置きたがっているのか……」

日頃の弥生のありさまを見ていれば、誰もが彼女を好意的に思う。誰にでも好かれる心優しい弥生を、神が欲してもおかしくはない。ましてや弥生は今回で2度目。そう思っても不思議ではなかった。「連れていかないでくれ！」

悲痛な叫びとともに、輝哉は力を失いその場に崩れるように跪いた。

（輝哉くん……）

リオは思わず輝哉の前に姿を現しそうになった。

留まるものの、その形は人間の姿となっていた。

人の目に映る間際でリオは力を押さえ込んだのだ。

（輝哉くんの前に現れちゃいけない）

もし姿を現せば、……それでもし弥生の命が危険にさらされたのならば、きつと輝哉は自分にもう一度弥生を助けてくれと頼むだろう。

頼まれなくてもリオは決心している。

しかし輝哉自らがリオに頼み、その後リオが戻らないと知った時、彼は自責の念にかられるに違いない。

輝哉の心に傷を残したくない。それはリオが一番望んでいること。

輝哉に気づかれずに弥生を救うのがベストとリオは考えていた。

ただ一つ気になるのはソラのこと。

自分が消滅した後、ソラが輝哉を責める恐れがあった。

かといって今ソラに会うわけにはいかなかった。会えば力づくで連れ戻されるのが分かっていたからだ。

(どうあっても輝哉くんには私が抹消されたこと知られるのかもされない。でもせめて自分が頼んだせいでって思われたくない)

力づけてあげたい。でも姿を見せるわけにはいかない。

リオは板ばさみになった。

そうこうしているうちにいきなり扉が開いた。

輝哉は瞬時に駆け寄った。もちろんリオもすぐ横にいる。

中から出てきたのは手術着を身に纏った看護師らしき女性と、そして。。。

「あ、あの……」

急ぎ足の女性は輝哉の存在に気づき立ち止まる。

手元には保育器の中で横たわる小さな赤子が弱々しい産声をあげていた。

「お父さんですか？ 女の子ですよ」

我が子との初めての対面。

輝哉の心は複雑だった。

新しい命の誕生。血をわけた我が子なら涙がでるほど嬉しいもの。……それが一般的な出産だったなら。

「すみません、急ぎますので。後程小児科の方へいらして下さい」
時間にして僅か十数秒の対面。

帝王切開で誕生した赤ちゃんは、検査のため早急に運ばれていった。

我が子を見送った輝哉は、片手で顔を覆い隠した。

「あの子が俺と弥生の……。頼む、生きてくれ！」

絞り出すような輝哉の声。それは弥生と誕生したばかりの子へのメッセージ。

リオには輝哉の姿が痛々しかった。

(まだ大丈夫。弥生ちゃんも赤ちゃんも命の力は尽きてないよ)

そう伝えたい。

リオはどうしても輝哉を励ましたかった。

だが声をかけるのはまずい。

一瞬躊躇したが、リオはそっと両手を伸ばし輝哉をやんわり包み込むように抱いた。

触れるか触れないかのすれすれ。自分がいるのを気づかれないようにそっと……。

(二人とも今懸命に戦ってるよ。輝哉くんも諦めないで、力強く願って！)

声にならない声でリオは必死に励ました。

(絶対二人の命は守るから。守ってみせるから。輝哉くんも希望を捨てないで)

「……リオ……ちゃん？」

輝哉の自分の名を呼ぶ呟く声にリオはびっくりし、輝哉の顔を見上げた。

「そこに……いるの？」

こつちを見下ろしている輝哉と視線が交わる。

(見えてるの?)

リオは姿が消えているかどうか自分を見ている。確かに人の目には映っていないはずなのに……。

(……見えてるのね)

輝哉の瞳がそれを物語っていた。

リオは観念しその姿を輝哉の前にさらした。

「いつ気づいたの?」

「子供と対面した後、かな。二人にずっとついててやりたいって思ったんだ。体を二つに分けてしまったかった。不安で不安で俺一人ではもう耐えられないって思った時、優しい雰囲気に包まれた気がした。元気付けようとする声が聞こえた気がした。リオちゃんが傍にいてるって感じたよ」

リオの力強い眼差しは以前にも輝哉を励ました。今度も輝哉はそれを感じ取っていたのだ。

「輝哉くん、あのね……」

リオは弥生の命が予断は許さないがまだ今すぐ消えるものではないことを教えようと思った。そして赤ちゃんの方は無事助かるであらうことも。

だがリオが続きを言う前に、輝哉はいきなりリオの足元に土下座をしたのだ。

「輝哉くんどうしたの！？ そんなことやめて！」

リオは驚いたが輝哉の胸の内を痛いほど分かっていた。

「リオちゃん、頼む。もう一度だけ弥生と子供を助けてくれ。代わりに何でもする。俺の命と引き換えてもいいから二人を救ってくれ！」

輝哉に言わせてはいけないと思ったが、とめることができなかった。

救うことはできる。しかし自分がどうなったか輝哉が知ったら優しい彼のこと、きつと罪の意識に苛まれ、最悪自ら命を絶つかもされない。

(どうしたらいいの?)

どうすれば輝哉の笑顔を守れるのかリオは悩む。

間の悪いことが更に起こった。

「リオ、お前二度と逢わないって約束したよな。こっち来いよ。家族が待ってるんだぞ！」

振り返ると声を荒立てたソラがそこにいた。

ソラはつかつか歩み寄ってくると、土下座のままの輝哉の胸座を掴み彼を無理やり立たせた。

「リオに何頼んでんだよ。お前のせいでリオがどんな目に合ったか分かってんのか!？」

「ソラ、やめて!」

リオは慌てて間に割って入る。

輝哉にあのことが知られてはならない。その思いで必死にソラをくいとめようとした。

「帰るから! ……約束守るから輝哉くんを離して!!」

掴んだ手を離さず、視線だけをリオに向けてソラは問う。

「本当だな?」

ただ事でない二人の様子に、輝哉は漠然と自分のせいでリオに被害を与えていたことを知った。

それが恐らく弥生を助けたためだからということも。

それでもリオは知られたくない一心で、ソラを輝哉から引き離そうと頷く。

「ソラと帰る」

それを聞いたソラは輝哉を離れたその手でリオの手を掴んだ。

「行くぞ」

「ちょっと待って」

留まるリオに、ソラは訝しげに彼女を見た。

「最後までいきちんとお別れさせて。もう逃げないから」

切実に訴えるリオの瞳を前にして、躊躇いながらもソラは承諾するしかなかった。

「絶対逃げないな？ 俺と帰るな？」

もう一度確認する。

リオは真っ直ぐソラの目を見て頷いた。

ソラは二人から距離を置いた。

「あの後、何かあったんだね？」

ポツリと輝哉がリオに問う。

自分が彼女にとんでもない仕打ちをしたのではないかと悩んでいた。

考えてみれば命を分け与えるなんて簡単にできることではなかったのだ。リオの笑顔に隠された真実を、あの時の輝哉は少しも分かっていなかった。

「……ちよつと罰を受けただけ。輝哉くんが気にすることないよ」

リオは輝哉に罪を感じさせまいと微笑んで言った。

そしてリオは輝哉の心を確認しようと口を開く。

「輝哉くん、さっき何でもするから弥生ちゃん達を助けてくれって言ったよね。だったらあなたの心をくれる？ 弥生ちゃんを助ける代わりに、あなたは弥生ちゃんや子供と別れるの。彼女の心を裏切るの。……できる？」

輝哉の顔が苦しみで歪む。長い沈黙が流れた。その間輝哉の心は葛藤し続けた。

やがて一つの答えに辿り着いた輝哉は、ふと一呼吸し首を横に振った。

「俺には弥生の心を裏切るようなまねできない。もし仮に君の条件を呑んで助けてもらったとしても、事実を知ったら一番苦しむのは弥生だ。与えられた命を手放すかもしれない。……俺は、俺と弥生の心を尊重するよ」

(あなたならそう言うと思った)

自分の命すら差し出せる輝哉が唯一渡せないもの、弥生への想い。

リオは輝哉の心分かかっていて、それを試すようなまねをしたのだ。

この二人のためだったらこの命を散らすことに何の不満もなかった。

「輝哉くん、赤ちゃんの命の心配はまずないよ。弥生ちゃんの方も状況は苦しいけどきつと助かるよ。私の助けなんかなくても……前に言ったよね。私達には生命力の危ない魂が分かるって。だから二人は大丈夫だよ」

輝哉を安心させたかった。たとえ少しでもいいから。

「本当に……？」

「うん」

しかしリオには分かっていた。

赤ちゃんが無事なのは本当だが、弥生の命はここ一日二日が峠になるだろうことを。そして彼女の衰弱からいくと、多分持ち堪えられないだろうことを。

それでも心の負担を少しでも軽くしてあげたかったのだ。

そして事実、輝哉はリオの言葉を信じようと努めた。

輝哉を残し、リオはソラのもとへ戻って行った。

(7)

その夜、リオは妖使界の自分の家から抜け出そうとした。もう戻れない覚悟はできていた。

家族は別れの手紙を後で読むことになるだろう。

リオはそつと窓を開け、そこから出ていこうとした。その時。

「リオ……」

囁くような小さな声がし、ドアを見るとそこには姉が立っていた。

「行くのね。……もう、戻ってこないのね？」

瞳に涙をいっぱい溜めそれでも堪えようとする姉を見て、リオは彼女だけが気づいていたことを悟った。

「姉さん、ごめんね。父さんと母さんにも謝っておいて」

姉はリオを抱きしめた。

「もう、止められないのね。後悔しないのね？」

リオも涙を流さずにはいらなかった。でもゆっくりしている時間あまりなかった。

「姉さん、伝えて。リオは幸せでしたって。精一杯生きましたって」

それだけ告げると、リオは振り切るようにして窓から飛び立って行った。

* * *

集中治療室の一角に、弥生はいくつかの配線に繋がれ静かに眠っていた。

母体へのダメージは大きく、昏睡状態であった。

ガラスで隔てられた廊下の片隅にある長椅子に輝哉はいた。

衰弱しきった顔は精神的ダメージの大きさを物語っている。虚ろな瞳は一体何を映し出しているのだろうか。

リオの言葉を信じようと何度も何度も心の中で繰り返した。が、弥生の姿を前にして輝哉の心は不安の渦に呑み込まれていく。医者からは今日明日が峠と宣告されていた。

リオは透明な人間の姿で2人の間に降り立ち、双方を見てひとまず深呼吸した。

(間にあつたようね、良かった)

リオの視線はじっと弥生を見据えた。

(やっぱり弥生ちゃんの魂、持ち堪えられないね……)

魂の放つオーラがリオの目にはぼんやり消えかかって映った。

あまり時間は残されていない。このままでは数十分後に容態は急変するだろうと予測できた。

リオは輝哉の目の前に跪いてその顔を見つめた。

（弥生ちゃんを守るからね。輝哉くんと弥生ちゃんと赤ちゃん、三人の家族の幸せ願ってるよ。私の渡した命の分も精一杯生きてね。それで私は報われるから……）

リオは微笑み、そつと輝哉の両頬に両手を添えた。そして静かに口づける。

触れるか触れないかの最初で最後の輝哉へのキス。

（あなたを愛せて私は幸せだった。あなたと出会えたことが私の人生の最高の出来事だったって、今なら胸張って言えるよ。……輝哉くん、さようなら）

リオは輝哉に心の中で別れを告げ立ちあがった。その足で集中治療室へと入っていく。

誰もいないはずがドアが勝手に開いた。だが、その異変にも輝哉は気づくことはなかった。

中では数人の看護師がせわしなに仕事をこなしている。

リオは弥生へと近づいた。

機械だけが今弥生がまだ生きている証だといわんばかりに、規則的な音を発していた。

(弥生ちゃん、もうすぐ目覚めさせてあげるね)

リオは励ますように弥生の片手を両手で包み込んだ。そして意識を彼女の夢の中へと集中させる。

夢ならリオは自由に操作できる。リオは弥生とだけでも面と向き合って話が見たいと思った。

『 弥生ちゃん、……弥生ちゃん、私が誰だか分かる？ 』

宇宙のような闇の中、弥生はポツンと立っていた。リオはそんな彼女に近寄り声をかけた。

『 ええ、リオちゃんですよ。天使じゃなくて妖精のリオちゃんが迎えに来てくれたの？ 』

弥生は自分の命が尽きたものと思っているようだった。リオは否定する。

『 弥生ちゃん、諦めちゃいけない。あなたは生きてるの。これからもずっと生きていくの。輝哉さんと赤ちゃんと三人で幸せになるのよ 』

『 赤ちゃ……ん？ 』

『 そう。無事産まれたんだよ。女の子だって 』

弥生はホッと安心したように涙を流した。が、すぐさま淋しそうに俯いた。

『逢いたい。でももう戻れないみたい……』

リオはぎゅっと抱きしめた。

『諦めないで。絶対逢えるから。私が保障する！』

そして弥生の瞳を見つめ願いを託す。

『輝哉くんをお願いね』

そう言い残し、リオは現実の世界へと戻ってきた。

(輝哉くんを幸せにしてあげてね。それができるのは弥生ちゃん、
あなただけだから……)

リオが弥生へ命を吹き込もうと身を屈めた、その時。

「リオ、やめろー!!」

悲痛な大きい叫びが廊下から響いてきた。その姿を見て、リオは
目を見開いた。

「ソラ……」

嫌な予感に念のためリオの家へ様子を見に行き、リオが姿を消し
たことを知ったソラだった。

突然響いた大声に、さすがの輝哉もビクツと我に返り、どこから
ともなく聞こえてきた声の主を探していた。

「やめてくれ、お前死ぬんだぞ!!」

ソラは叫びながらその身を人間へと変化させ、猛然とリオのもとへ向かってくる。

輝哉は突如現れたソラに驚き、彼がリオの知り合いで、更にリオが何かしようとしていること知った。そしてその何かが弥生の命と関係していることも。

「リオちゃん、まさか……」

弥生を助けようとしているのではないかと思う輝哉。

一方リオは急いでやってくるソラがここまで来ないうちにと、瞬時に弥生へ命を吹き込んだ。

直後ソラがリオの肩を掴み振り向かせる。リオの目に苦しく切ない瞳を宿したソラが写った。

「ソラごめんね。誓い……守れなかった。ソラの想いに応えられなくて……ごめんね」

そう言って弱々しく微笑んだりオはゆっくり瞳を閉じ、二度と覚めない深い眠りに吸い込まれていった。

ソラの手から滑り落ちたりオは人の目にも写る妖精の姿となって、まるで人形のように床に横たわっていた。

「リオ……?」

何の反応もないリオを、ソラは跪き震える両手で愛しそうにすくいあげる。すでに魂のない抜け殻となったりリオの体を、ソラは抱きしめるように胸に押し当てた。

「リオ ツー！」

慟哭が響き渡る。ソラの瞳からは止めど無く涙が溢れ出した。そしてその胸の内には深い哀しみと同じくらい、憎しみという感情が湧きあがる。

「許せねえ……」

ソラはリオを抱えたまま輝哉に向かっていった。

輝哉もまた内で起こった出来事に尋常でないものを感じ取っていた。自分のもとへやってきたソラに、何が起こったのか輝哉には尋ねるしか術がない。

「リオちゃんに何があったんだ、教えてくれ！」

きつい視線を向けたソラは無言でリオの体を輝哉に突きつけた。

「リオ……ちゃん？」

輝哉はリオに触れようと手を伸ばした。

「触るな！」

輝哉はソラの一言にビクッと手を引っ込める。

輝哉は血の気のないリオの顔を見て、ソラの「お前死ぬんだぞ！」という言葉思い出した。

「まさか、死……」

輝哉は息を呑んでソラを見た。

その瞬間バキツと骨の軋むような音がし、輝哉は吹っ飛ばされていた。ソラは握り締めた片方の拳を震えるほど強く握り締めていた。

「俺達妖精は人に命を分けることを御法度とされてる。その罪を犯せば魂そのものを抹殺されるんだ。前にリオが助かったのは、王様が今回だけはお許し下さったから。でも二度目は必ず抹殺されることになってたんだ！」

輝哉が初めて知る真実。輝哉の心に命を分けると告げた時のリオの笑顔が浮かんだ。

輝哉はあの時の笑顔の裏に隠されたリオの決意に今更ながら気づいた。

「どうして本当のこと言ってくれなかったんだ。リオちゃんを犠牲にするなんて思ってもみなかった……」

「知らなかったで済まされるかよ！」

ソラは輝哉の胸座を掴み、憎しみを湛えた瞳で輝哉の目を見る。

「あなたは気づいてたはずだ、あいつの想いに。その想いを利用し

たんだ。自覚がなくても、あいつがあんたを裏切れないのは分かってたはずだ。違うか!？」

ソラに見据えられた輝哉は思わず目を逸らした。

確証があつたわけではないが、輝哉はリオの想いに何となく気づいていた。でもリオからは何も告げられなかったため、自分の思い過ごしかと思つたのだった。

そしてようやく気づく。

リオが想いも事実も口にしなかったのは、自分の死を輝哉のせいになせまいとした彼女の思いやりだったということに。それが彼女なりの輝哉への想いの表現だったということに。

「どう償えばいい。……どう償えるというんだ、君はもういないのに!！」

輝哉の瞳から涙が溢れ出した。吐き出すような叫びを受け取る人はもういない。分かっていながらも、輝哉は叫ばずにはいられなかった。その時。

「……もうやめて」

微かな声が二人に届いた。もうどこにもいるはずのない女の子の声に、二人は驚きを隠せなかった。

「やめて。誰も悪くないんだから……」

二人の前に、儂い幻影のごとくリオは妖精の姿を現した。

ソラは輝哉の胸を掴んでいた手を離し、信じられない思いでリオへ手を伸ばす。だがその手は幻影を擦り抜けた。

リオは悲しそうに微笑む。

「これが私の最後の力。お別れする時間は残されてたみたいね」

そう言ったリオの目の前で、輝哉は廊下に土下座するように座り込んだ。床につけた両拳は震えていた。

輝哉はリオを振り仰いだ。

「どうしたら償える？ どうすれば君の想いに報いることができる？ ……俺の命じゃ君を生き返らせられないのか？」

リオはそつと輝哉の手元に舞い降りる。リオはまずソラを見上げた。

「私は誰も恨んでないし、後悔もしてないよ。私は私の心に正直に従ったまで。だからソラ……輝哉くんを責めないで。私からの最後のお願ひ。……いい？」

リオはすつきりとした表情に笑みさえ浮かべていた。その様子に、ソラはリオに対してできる最後のことだと痛感し頷いた。

リオは涙を流し続ける輝哉を見る。

「輝哉くん、私は償いなんていらないよ。……前にも言ったよね。一生かけても心の底から愛する人を見つけれない人がたくさんい

るって。でも私はあなたと出会って、あなたを愛せた。それだけで充分だよ。それでも償いたいというなら、弥生ちゃんと赤ちゃんを幸せにすること、笑顔を絶やさないこと。この二つ、私と約束して」

輝哉の心はリオの明るさに救われていく。リオは輝哉が後ろめたい思いを残さないよう、あえて約束を提示したのだった。

「……約束するよ。俺の命にかけても、この約束だけは守るから」

輝哉の力強い言葉にリオは微笑んで頷いた。

そしてとうとう最期の時が訪れる。リオの姿は益々薄くなっていた。

「二人とも幸せになってね。じゃ、本当に………バイバイ！」

リオは二人に笑顔で手を振った。

リオの魂の最期は、まるでダイヤモンドダストのようにキラキラ輝き、散っていったのだった。

* * *

目覚めた弥生の傍に、輝哉は彼女の手を握って跪いていた。

弥生はその手を動かし輝哉の頬に触れる。

「何かあったの？」

まだ乾ききらない涙の痕に弥生は気づいたのだった。

輝哉は弥生に責任を感じさせまいと首を横に振った。

弥生は天井を見て深い呼吸を一度し、再度輝哉を見る。

「リオちゃんに感謝しなくちゃね」

その言葉に輝哉は驚いた。

「夢の中で励ましてくれたの。リオちゃんのおかげで私戻ってこれたの」

輝哉は知る。弥生がそれとなく気づいていることに。

「弥生……」

輝哉は弥生の手をぎゅっと握り、自分の頬を近づけ触れさせた。

輝哉の瞳から新たな涙が一筋伝う。それを拭おうともせず、輝哉は弥生の顔を見つめた。

「子供の名前、……里央ってつけてもいいかな？」

リオの死ぬ前に生まれた子が、リオの生まれ変わりであるはずがない。リオは消えたのだ。

分かってはいるが、輝哉は自分の子にリオの名をつけたかった。

リオが見るはずだった未来を、子供の目を通して彼女にも見せてあげたい、伝えたいと思ったのだ。

そしてリオのように優しくて明るい笑顔の似合う子になってほしいという願いもこもっていた。

弥生は優しく微笑んだ。

「私もそう思ってたの。女の子が産まれたと知った時からね」

弥生の言葉を聞いた輝哉の顔にも笑みが浮かぶ。

輝哉は天井の遙か高くに視線を向けた。

リオが笑顔で見守っている気がした。

【終わり】

(7) (後書き)

7回に渡って投稿しました「君の笑顔を守りたい」、今回で完結です。

お読みくださった方々ありがとうございました。
感想などお聞かせ頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6393i/>

君の笑顔を守りたい

2011年6月13日00時00分発行